

実施報告書

教育講演会「7ヵ国語で話そう」

30周年記念 特別講演会

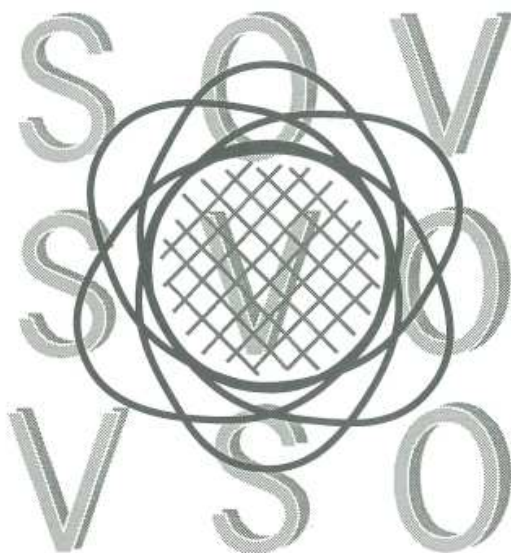
『多言語が生み出す無限の可能性』

『最新の脳科学』と、『多言語における言語獲得研究』の両面から
ことばと人間を捉える

2011年10月18日(火)

午後7時～9時

国立オリンピック記念青少年総合センター



主催：言語交流研究所 ヒッポファミリークラブ

後援：文部科学省

Language Station
hippo
AS 100 MEMBERS LANGUAGE STATION JAPAN

2011年10月18日(火)に実施しました教育講演会「7ヵ国語で話そう 多言語が生み出す無限の可能性」では、言語や自然科学など多岐にわたる分野に関心をお持ちの方々約600名に向けて、Suzanne Flynn先生(米MIT言語学、多言語獲得研究教授、LEX America 理事)、酒井邦嘉先生(東京大学大学院 総合文化研究科准教授)による基調講演を中心に、最新の研究報告、多言語習得活動の報告をさせていただき貴重な機会となりました。

今回は、全体の企画、運営を大学生や海外からのインターンの学生たちにも協力してもらっての実施となり、多言語も飛び交う楽しい講演会となりました。

当日参加いただいた方々からは、ご感想やご意見を多数いただきました。また当講演会の実施に際してご協力いただきました関係各位には感謝申し上げます。

プログラム

- ◆開会 午後7時
- ◆司会あいさつ
- ◆本日の講演会の開催にあたってのご挨拶
鈴木 堅史 (言語交流研究所理事)
- ◆体験談 (ことばの習得、留学、ホームステイなど)
- ◆特別講演1 「On Raising Multilingual Children」～多言語環境が育てるもの～
スザンヌ・フリン (マサチューセッツ工科大学/言語学、多言語獲得研究 教授)
- ◆特別講演2 「言語の脳科学」～脳はどのようにことばを生み出すのか～
酒井邦嘉 (東京大学大学院/総合文化研究科 准教授)
- ◆閉会 午後9時



司会には中国からのインターンの大学生と日本の大学生が入りました。



多言語活動を実践している、小学生、メキシコの高校生などの体験報告



ボランティアで手話通訳をしていただきました。

講師紹介



Dr. Suzanne Flynn
マサチューセッツ工科大学 言語学教授

スザンヌ・フリン教授は、幼少の頃から母語以外のことばを話すことに対して興味を持ち、1983年、コーネル大学にて学位を取得。現在、米国マサチューセッツ工科大学にて、言語学および多言語獲得研究の教授として活躍中です。
ノーム・チョムスキー (1928～) の学説として有名な「生成文法 (generative grammar) 理論も含め、30年以上にわたり人間の言語獲得の秘密や環境を研究。その結果、「多言語を話すことは人間にとって自然である」「人間の言語獲得能力には限度が無い」「自然な多言語環境/体験は人間の知性を伸ばす」「多言語人間は認知症になり難い」などの学説を提唱しています。



酒井 邦嘉
東京大学 准教授

1987年、東京大学理学部物理学卒業。92年、同大学大学院理学系研究科博士課程修了。理学博士。同年、同大学医学部助手。95年、ハーバード大学医学部リサーチフェロー。MIT (マサチューセッツ工科大学) 言語・哲学科客員研究員を経て、現在、東京大学准教授。大学院総合文化研究科関連基礎科学系。
言語に規則があるのは、人間が言語を規則的に作ったためではなく、言語が自然法則に従っているからである。こうしたチョムスキーの言語生得説は激しい賛否を巻き起こしてきたが、最近の脳科学は、この主張を裏付けようとしている。実験の積み重ねとMRI技術の向上によって、脳機能の分析は飛躍的な進歩を遂げた。こうした背景の中で、失語症や手話の研究も交えて、言語という究極の難問に脳科学の視点から挑んでいる。

Dr. Suzanne Flynn の講演概要

On Raising Multilingual Children

「多言語環境が育てるもの」

スザンヌ・フリン教授は、「人間のことばを獲得する能力は無限であり、いわゆる臨界期と言われるようなものはなく、何歳になっても新しいことばを獲得することが可能」であるなど、最新の言語研究から明らかになってきた「ことばについて10の基本的なこと」を話されました。



1. Human language is a unique and special human capacity.
: ことばを話すことは、人間特有の能力です。
2. There is underlyingly only one human language.
: 基本的には、人間のことばは1つしかありません。
3. A child is not “ taught ” language.
: こどもはことばを「教わる」のではありません。
4. Multilingualism is the natural state of the human mind.
: 多言語は、人間の知能(知性)の自然な状態です。
5. There is really no limit to the number of languages one can learn.
: 一人が習得できることばの数に限りはありません。
6. Everyone can learn a new language throughout one’s lifetime and in fact doing so will help you stay mentally young.
: 誰でも生涯を通じて新しいことばを学ぶことができます。それどころか、それによって心を若く保つことができます。
7. The more languages you know, the easier it gets.
: 多くのことばを知れば知るほど、習得するのが簡単になります。
8. You never lose the languages you acquire.
: いったん獲得したことばは、決して失うことはありません。
9. Maintaining fluency is easiest when there is a need to be multilingual.
: ことばの流暢さを維持するには、多言語の場(環境)があることが一番です。
10. Knowing multiple languages has important positive consequence at multiple levels for our lives and minds that last a lifetime.
: 複数のことばができることは、生活や心のさまざまなレベルにおいて、重要でポジティブな結果をもたらし、それは生涯にわたって続きます。

酒井邦嘉先生による講演概要

「言語の脳科学」

教育という視点を交えて、言語の脳科学について講演されました。



酒井邦嘉先生の講演

* 人間の言語というものを「生得的発達」(チョムスキー)とする立場、また「後天的学習」(ピアジェ)とする立場があること、またそのどちらでもないという立場から、言語をめぐる様々な議論がなされてきた。その中で、母語は教育を必要とする年齢に達する以前に獲得されることをみても、母語は教えなくても身につけてしまうという人間の言語の特徴、その不思議さを強調したのがチョムスキーである。我々「人間にとっての言語」というものが、どのようにして身につくのかを、脳科学の視点から考えていきたい。

* 感受性期(臨界期)という考え方は、脳科学から出てきた考え方で、そのことは1970年代の猫の視覚野の実験によって確立された。生後2~4週の猫が、環境の中で目にするものを限定し、その後成長した猫の脳がどのように外界の刺激に反応するかを調査する実験を通して、視覚野をつかさどる脳のニューロン反応を観察してみると、縦じまのカーテンの中で育成した猫は、縦じまにしか反応しないこと、つまり外界の刺激に対して脳がチューニングするということが明らかにされた。このことから、たくさんの刺激に触れることは、脳がよりたくさんの細胞を使い、より深いところで情報処理できるようになるということでもある。人間で同様の実験はできないが、多言語を使いこなす人間にとって必要なのは、多言語の環境であると考えられる。

* 目に見えない「ルール」こそ、創造性の本質である。言語において記述できる規則性(文法)は、一握りであり、規則化ができないもののほうが膨大なのである。人間にとっては、その目に見えない「ルール」のほうが重要であり、それは教育できないものともいえる。母語が教育法を必要としないように、脳には生得的、遺伝的に、人間が言語を本能のようなものとして理解し、話せるようになることを可能にするものがプログラミングされている。それは、英語でも、日本語でも脳の活動が同じところに現れることから、普遍的なものであるといえよう。人間は誰でも、どのような言語でも生得的に獲得できるということである。

以上のような内容で、約40分間講演をいただきました。脳科学の分野からの研究成果に教育という新しい視点を交えながら、人間にとって言語とは何かという本質的なものに迫る話をうかがう有意義な機会となりました。

2011年10月18日 30周年記念特別講演会 『多言語が生み出す無限の可能性』アンケート抜粋

男性 20代（手話通訳士）

私は CODA(Children of Deaf Adults)なので、手話と日本語のバイリンガルの環境で過ごしていました。そのため多言語に関心がありました。手話をする際にも脳の言語野を活用していることは分かっていましたが、文法野を使っているバランスの内容については初めて知ったことです。今日のことは今後の多言語環境の構築に関心がもてる内容でした。ありがとうございました。

男性 30代（自営業）

スザンヌ先生の講演を受けて： ボランティアで、外国人に短期間の日本語レッスンをする機会があるのですが、非常に刺激的でした。本日は手話通訳の方もいらしていましたが、オーラルでない言語についても触れてもらえたらより面白かったかと。(たしかチョムスキーはニカラグア手話の研究もしていたような…)

酒井先生の講演を受けて： 私も、鈴木メソッドをやっていたのでよくわかります。脳活動節約の話は面白かったです。

女性 20代（教員）

初めてこのような講演を見にきました。多言語についてのお話はとても興味深かったです。英語教員をしていますが、現在は英語の歌を授業で取り入れています。自然と耳にする言葉の重要性を知ることができましたので、これからもどんどんさまざまな曲や言葉をお子供たちに教えていきたいと思っています。本日は貴重なお時間、ありがとうございました。

女性 中学3年生

酒井先生もスザンヌ先生も、講演を聞くのは初めてでした。私の学校には留学帰国生がいるので、結構英語が飛び交っていることが多いのですが、私は大体意味なんて分かりません。でもこのような音はどうしたら出せるかなどが、すぐにネイティブの友人に聞けることはとても恵まれていると思っています。帰国生たちの会話は日本語と英語が混ざっていたり、微妙なニュアンスで切り替えていたりするので、自然に出てきているのだと思いますが、そんな風にあまり言語中枢を使わなくてもできるようになってみたいと思いました。学校などで文法の勉強をするだけでなく、ヒッポやいろんな人と出会っているような音と触れ合っていきたいと思っています。

女性 40代（小学校教員）

プリン先生の生の講演は本当に自分の中にピンピン入ってきました。時間とエネルギーをどのように使うかで、人生を豊かにすることができます。これからの自分の生き方(ヒッポへのとりくみ方)がみえた気がします。酒井先生のお話は本当におもしろかったです。脳科学の分野からヒッポの多言語活動の意義を見て、あらためてヒッポへの興味・意欲がわきました。酒井先生のお話、何度でも聞きたいです。

女性 高校生

私は個人的にスザンヌ先生&酒井先生に少し勇気をもらうことができました。

今まで才能や頭の良し悪しを信じていた人間なので…。でもそんなものは無いのだと講義され、嬉しいと言えいいのか…なんと言えいいのかわかりませんが、とにかく勇気付けられたんです。受験生なので、これから勉強法や語学習得のやり方や考えがわかりました。活かしていきたいと思います。酒井先生にぜひもっと勉強法と脳について聞きたいです。

女性 40代

前回のスザンヌ先生の講演会も聞きましたが、前回よりもより講演内容が良くわかったと思います。

特に10カ条の10個目の項目について、最後にヒッポが多言語習得においてとても良いと断言してくれていた事はとても嬉しく思いました。講演内容もどんどん進化しているので楽しくお話を聞くことができました。

酒井先生のお話では、言語を理解する時の脳の活動はネイティブほど活動が節約されるという話がすごく印象に残りました。確かにスザンヌ先生の英語を一生懸命聞いている時はものすごく集中力を使ってしまっただけで疲れるな～と思いました。お二人のすばらしいお話が聞けてとても幸せでした。本日はありがとうございました！

女性 40代 (主婦)

スザンヌ先生のお話の中で日本語と英語はひとつの言語の幅の中で端と端にある。そこにスペイン語や中国語があると習得しやすくなるというのは、ヒッポをやっていて、すごく実感する点です。やればやるほど、共通点、似た音など発見がたくさんあって、どんどん楽しくなります。今日は来てよかったです。

酒井先生のお話では、

- ①日本人に文法テストをしたら文法中枢以外の他の3つの中枢も使う。
- ②ネイティブは文法中枢のみ使う
- ③長期勉強している日本人は成績があがればあがるほど文法脳を使わなくなっている。

という研究結果が面白かったです。

20年前にオーストラリア人に英語の文法をきいたら「なぜならそうとしか言わないから…」と言われたのが今でもショッキングでした。そのことを思い出します。

50代男性 (食品会社勤務)

酒井先生の話が面白かった。言語だけでなく、しばらくは「何だこれ？」と思っていたものが「分かった」という瞬間がやって来るが、それが「こういう事か」というのがわかった気がする。それを得た時から、脳は少ない負荷で問題を解決できるようになるのかなと思う。これはスポーツや料理とか様々の事に共通する事で、「それが自然」という事ではない

のかなと感じた。Hippo は音に触れ、聞ける耳を持ち、音が意味する物体や現象を即座に理解できるの脳の働きを獲得する素地を作ってくれる活動である気がする。この「分かる」世界をいかに効率的に作り出していくかが今の課題ではないかと思う。スザンヌさんの話もこうした事の帰結かなと思う。

女性 20 代（会社員）

ヒッポの活動を小さい時からやっていると、多言語を等しくとらえることは、特に不思議なことだとは思わないのですが、それを、ヒッポとは全く関係ない(なかった?) 学問として研究されている(しかも MIT や東大の) 先生が、研究成果から言われていることは、とてもおもしろいと思います。

最近、スザンヌ先生の言われていた各言語の差は「程度の差でしかない」を体験しました。

職場でマレーシア語と中国語を話す機会がありました。私にとって今までマレーシア語や中国語は少し遠い存在だと思っていたのですが、何となくたまたまやってきたマレーシア語や中国語がなんとなくわかったと思った瞬間から、私もマレーシア語や中国語ができるかも！と思いました。

ヒッポのメンバーの人と一緒にだと、これらのこともごく普通に感じるのですが、ヒッポの環境と切り離されたところでも実感して、その確かさを味わいました。

女性 10 代（学生）

興味深かったです。酒井先生がおっしゃった成績が上がれば文法中枢だけ活発に使われ、熟達すると節約されるのは自分の体験的に実感できます。でもなぜ文法を勉強すれば将来につながるか分かりませんでした。

しかし私は英語を勉強することは、話せることや受験のためだと思っていたのですが、その脳の働きをトレーニングさせることで、将来の自分の人生で生きるのだなと思いました。

男性 40 代（会社員）

スザンヌ・フリン教授の 10 の基本的なことはどれも共感できるもので希望が出てくるものばかりです。特に誰でも生涯を通じて新しいことばを学ぶ事ができ、それどころかそれによって心を若く事ができることが印象的でした。

昔は 12 才過ぎると脳に変化が出て英語を身につけることが難しいと思っていたので衝撃的でした。いろいろなこと、多言語をやってみて自分の感情を豊かにしていきたい。

脳は省エネを好むことが分かったが、省エネモードにならないようリフレッシュしていかなければと思う。

言語交流研究所 ヒッポファミリークラブ

LEX / Institute for Language Experience, Experiment & Exchange

〒 150-0002 東京都渋谷区渋谷 2-2-10 青山 H&A ビル3 F

TEL 03-5467-7041(代) <http://www.lexhippo.gr.jp>